

<功 績>

本研究班は、日本体育協会・JOC 創立 100 周年、換言すれば、日本の組織的スポーツ活動が 100 年を迎えたことを機に、今一度、我が国におけるスポーツ組織の創始者といえる「嘉納治五郎」の思想と実践を紐解き、21 世紀の現代スポーツのあり方を再考することを目的とする歴史社会学的研究を行った。

本研究では、嘉納の体育観、教育観などを通して、嘉納の示した「精力善用」「自他共栄」の精神は、平成 23 年に日本体育協会と JOC が公表した「スポーツ宣言日本」で示された 21 世紀におけるスポーツが果たすべき新たな社会的使命として掲げられた『公正で福祉豊かな地域生活』の創造への寄与、『環境と共生の時代を生きるライフスタイル』の創造への寄与、『平和と友好に満ちた世界』の構築への寄与』という 3 つのグローバル課題に通底していること、嘉納による女子柔道の展開から、現在のスポーツ界における社会的平等や公正を一貫して実現していくために、民間スポーツ組織は指導的且つモデル的な組織編制の統一性とその実効性が求められていること、スポーツの大衆化と高度化を有機的に結びつけるスポーツ組織の「統括性」を念頭において各種事業展開等に取り組みなければならないことなど、現在、我が国スポーツ界が抱える今日的課題を明示した。

さらに本研究班は、嘉納の趣意が、21 世紀のスポーツにつながる意義と課題を提示していることを、我が国スポーツ界の多くの関係者が理解し、そのビジョン達成のための課題解決に向けた具体的な方法論を構築し、実行していく必要があると示唆している。

このように、本研究班のオリジナリティーは、「嘉納治五郎」という人物の思想や実践を、一方的に礼賛もしくは批判するのではなく、これらと他の諸人物、諸組織及び社会的動向との関係について、現代スポーツが抱える今日的課題の析出という観点から、仮説的な解釈を積み上げビジョン化することによって、民間スポーツ組織のより一層の重要性を指摘している点にある。また、文献講読を方法とする人文社会科学の学際的な共同研究における難しさに果敢に挑戦し、他に類を見ない学術的価値の高い研究成果となっている。

そして本研究班は、平成 26 年 8 月に、平成 22 年から平成 25 年の 4 年間をかけて行われた本研究の成果を、「過去のオリンピック東京大会招致を巡る思惑と嘉納治五郎」、「嘉納治五郎の体育思想とその実践」、「嘉納治五郎の柔道思想とその実践」、「現代スポーツと嘉納治五郎」という四部に序章と終章を含む 13 章立てで構成された一般書籍「現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか ―オリンピック・体育・柔道の新たなビジョン―」（ミネルヴァ書房）としてまとめ発刊した。

特に、嘉納が関わった過去のオリンピック東京大会招致に関して言及された本書の内容は、2020 年に東京オリンピック・パラリンピック競技大会を控え、国内外を問わず我が国のスポーツ界が注目される今、一読の価値を有するものである。

同時に、代表である菊氏が「日本の現代社会における真のスポーツの発展と人びとのスポーツ需要における質の高まりは、むしろこれからのスポーツ制度やスポーツ組織のあり方にかかっていると断言ではない」と書籍で述べるように、今日の我が国スポー

ツ界がさまざまな課題を抱える中、21世紀のスポーツビジョン達成に向けた今日的課題を指摘した本研究班の成果が盛り込まれた同書は、今後のスポーツ界の担い手である多くの人びとに貴重な示唆を与える一冊である。

今回、本研究班が、提示した研究成果が、今後の我が国スポーツ界の発展にどのように活かされ波及するか、大いに期待が寄せられる。